

サマショーロとはチェルノブイリ原発事故の立ち入り禁止地域に勝手に住み続けたり、避難先から舞戻って生活を続けている「わがまま者」と呼ばれる人々である。もちろん法的には違法だが、ウクライナ政府は「人間は死ぬ場所を選ぶ権利がある」として半ば容認している。当然中高年者が多く、当初は数百人いたが次第に減少している。放射能汚染があり危険な場所になぜ彼ら彼女らは住み続けるのか。

森の中の老女

彼女と偶然会ったのは2001年9月、ウクライナのナロジチ地区の森の中で一人ぼっちで暮らしていた。名前はアナスタシア・イワーノブナさん（愛称ナースチャ）、当時72歳だと言った。チェルノブイリ事故後15年後だった。住民が皆避難し誰もいなくなった村で彼女は牛2頭と鶏、ミツバチを飼い、犬と一緒に暮らしていた。誰とも会わない毎日のはずなのに彼女は綺麗なスカーフをかぶり、美しい服装で牛を追っていた。「何故ここで？」との問いに「私は身内も居ないし身寄りもないのでここで暮らすことにした。放射能は怖くないが電気が止まって不自由だ」とこぼした。小さな家の中は綺麗に掃除され、美しい壁掛けもあって、今にも客を迎えるのかと思えるほどにテーブルも整頓されていた。家畜を飼い蜂蜜を採って、畑を耕す毎日である。恐らく原発事故前もそうだったであろう暮らしの何が彼女を今も続けさせているのか、そこには本人も自覚していない何かがあるのかもしれない、と様々な考えが頭をよぎった。それが確信に変わったのは、彼女の日常について聞いた時だった。実は、この森の村に入る途中の道路の交差点はナロジチに行く時よく通過する場所だった。そこには小さな教会があり、時々覗いて見ることがあったが、誰も居ない筈の村はずれの教会なのに、いつも綺麗に掃除がしてあり、花瓶には美しい野の花が活けられていて不思議に思っていた。その話になった時、彼女はこう言った。「あれは私がやってるの。よほど悪い天気でもない限り2km先のあの教会に毎日通い、祈って掃除をして花を活

けている。毎年一回、クリスマスの時に村の人達が帰ってくるのが楽しみでね」。ちなみに彼女の家の入口の放射線量を測ると、毎時1.7 μ Svだった。同行した消防士は危険だから早く立ち去ろう、と私を促した。帰国後もずっと彼女の事が頭から離れなかった。彼女は単に故郷を離れたくない、という思いだけで生きているのではない。明らかに事故前とは違う人生を選んだ結果だと思った。

人間と人生の選択

人間は人と人とのつながりの中でこそ生きられる、という。福島原発事故でも友人知人と離れ、家族とも離散する困難は5年経った今も続いており、それを問題視しない人はいない。人間がコミュニティを作り共に暮らすことが幸せであり、目標だという考えは一般論として当然である。しかし、原発事故という強制力がきっかけにせよ、サマショーロという生き方を選んだ瞬間から、その人は別の人生を歩み始めたのだ。頼るべき他人も無く、社会とも隔絶し、変転する自然の流れの中の一人でしかない。その事を改めて自覚し、自らを律し、強くならなければサマショーロにはなれない。日が昇れば目を覚まし、日が沈めば寢床に就く。そんな日々を過ごせば、自らが自然や地球の一員として生きている事を自覚せざるを得ないだろう。ナースチャは、神と自然との対話を通じて日々を生きていたのではないだろうか。福島原発事故でも敢えて汚染と向き合い暮らしている人々がいる。彼ら彼女らの思いに真摯に向き合う必要があるのではないだろうか。

(2016年5月16日 河田)